
神国 第貳部～猛き緑に沈む者～

邪部そとみち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神国 第貳部「猛き緑に沈む者」

【Nコード】

N4352BA

【作者名】

邪部そとみち

【あらすじ】

10年ほど前に自サイトに掲載していた物です。20年以上前に参加していた創作同人サークルにて皆でキャラクター（オリジナルの神キャラクター）を出し合い、それを元に私が別PNで執筆した物です。厨二病真っ盛りな内容で途中で執筆も中断しているので、先日何となく懐かしくなって読み返し、黒歴史な恥ずかしい気持ちと、誰かに見てもらいたい気持ちがいっ感じ湧き起こってしまいこちらに掲載することにしました…「本編あらすじ」天地に数多くの神々が宿り人間や精霊達とともに暮らす異世界「神国」

ある時神々や人間の負の精神エネルギーから一柱の神が誕生した。
誕生直後にその神は力を半減させられたが600年後、自らの力の
一部を偶然取り込んで錯乱した若神と出会い「神国」に反旗を翻し、
神国に破壊と混乱をもたらすべく動き始めた…。2012年の早
い内に中断した続きを書きたい気持ちもあります。頑張りたいです
…。

第1章「緑色の微睡」（前書き）

神国とはこの物語の舞台となる世界の名称である。

天には一つの太陽と三つの月が巡り、海には六つの大陸が浮かぶ地上世界を中心に、宇宙や異次元世界「虚空」、死者の世界「冥界」等から物語世界は成り立っている。

天と地と海とのあらゆるものに神々が宿り、世界の全ての場所に神々が存在している。

神国とは、神々と、他の多くの生き物達とが共に日々を営む世界である。

第1章「緑色の微睡」

昼下がりの幾分きつい陽射しが、白いレースのカーテンから漏れ、ラノの貌を撫でていた。

時折吹くラシル湖からの微風が、開け放たれた大きな窓から流れ込み、ベッドに横たわるラノの柔らかな肢体の上を軽やかに駆け抜けて行った。

「ん……。」

閉じられた瞼の内で揺れ動く光にラノは眉をしかめ、眠りの中から微睡へ、微睡から現実へと引き戻されていた。

微睡の中で、ラノの見る夢は何処までも深い緑色に染まっていた。

夢の中で、人の拳程もある薔は固く閉ざされ、その先端だけが薄い紅の色を含み、細い剣を思わせる葉はさわさわと音を立てて風にそよいでいた。

何と言つ名前の花を、彼女は左肩に抱いていたのだろうか。

数日前迄は確かに自分の傍らに居た緑の幻神・・・かけがえの無い友の面影が、ラノの夢の中で揺らめいた。

「……………」

一瞬、ゼームの姿が弾け、瞼を上げたラノの水色の目に映ったのは、見慣れた自分の部屋の白い天井だった。

まだ半ばは眠りの中にある頭で、抜け切らない気だるさを感じながら、ラノはゆっくりと身を起こした。

寝乱れた白いシーツの上を、豊かな髪が流れた。

目覚めたばかりで喉の渴きをいくらか覚えつつ、ラノはベッドから立ち上がると、カーテンを静かに開けた。

まばゆい昼下がりの陽光が、一度にラノの部屋の中へ

と流れ込んで来た。

窓の向こうには、日の光を受けて鏡の様に輝くラシル湖と、それを取り巻く深緑の森の姿があった。

いつも見慣れた——何も変わりの無い景色。

何も変わらない——ラノは、開いた窓に薄く映る自らの顔と外の風景を見比べながら呟いた。

幻神リウ・ファイオによって数日前、ラノは心の「深い闇」と言う負の精神エネルギーを奪い取られたのだった。

だが、「深い闇」を奪い去ったところでその持ち主には何の影響も無いと言うレウ・ファアの言葉通り、その後ラノの体や心には何の変調も見られなかった。

むしろ、ラノは自らの心の暗部を目の当たりにした衝撃で伏せっているのだった。

「何も変わらない、わね……。」

微風に微かに揺れる窓へと手を掛け、ラノはもう一度力無く呟いた。

彼女の友——ゼムと共に育んだラシル湖の森も、また彼女自身も、変わっているものは何も無かった。

ティラルも、ゼムも——それぞれに自分のものとして独占し続けたいというラノの昏い思いもまた。

自らの昏い心への嫌悪感に涙を浮かべ、ラノは知らず窓辺に頭を垂れていた。

波打つ豊かな髪の幾束かがうつすらと赤味のさす頬へと被さった。

「——どうせ奪っていくのなら、この暗い心そのものを持って行ってくれば良かったのに……。」

ラノの震える声と共に漏らされた呟きも、ラシル湖の返す白銀と紺碧の光の波の中に溶けていった。

神国——神州大陸の北方には、「神々の森」と呼ばれる巨大な森林地帯が広がっていた。ここには様々な動植物以外にも多くの精霊や神々が棲まい、平野部や町に住む神々や人間達とは一線を画した世界を形作っていた。

「神々の森」は、周辺部に幾つかの小さな町や村を擁し、それらの境界には材木や山菜栽培等の為に人間達の手の入った森が「神々の森」を守る帯の様に広がっていた。

ロウ・ゼームが誕生した森もまた、こうした人間達の村落と「神々の森」の間に存在する境界部の森だった。

それは、二百年以上も前の事——。

「神々の森」の北西はシエゾ地方と呼ばれ、そこには海岸と森林とに挟まれたシーボームと言う小さな村があるだけだった。

村から数キロ離れただけで、人の手が入っているのが信じ難い程、小さな山道は巨木の茂みの中に沈んでいた。そんな細々と続く山道から枝分かれした先に、小さな広場の様な場所があった。

ちらほらと、針葉樹が混じって繁る広葉樹の森の木々は、その場所の近くでは猛々しくうねる大蛇の様な威容をもって聳え立っていた。

樹齢十数年の若木迄もが、この場所の近くでは生命力に溢れた巨樹の姿を訪れた者達に示していた。

広場の中央には、両脇に小さな二本の円柱を立てた祠の様なものがあった。

元は白く磨き上げられていた石の柱も長い年月の内にひび割れ、所々に厚い苔の衣を纏っていた。

この祠は、シーボームの土地神や人間達が立てた標識の様なものだった。

彼等はこの場所から、森の動植物を活性化させるエネ

ルギーが溢れている事を直感と経験から察知していたのだった。

実際にはこの場所は、星の生命力を形成する根源的なエネルギーの流れ——レイラインの小規模な集束点の一つだった。

神国ではその知識は秘密とされていたが、土地神と村人の素朴な直感は、図らずも集束点の場所を指し示していたのだった。

ある日の夜明けに、その祠の場所を流れる大きな何かが音を立ててうねった。

静寂と沈黙に支配された森の中に、不可思議なざわめきが湧き起こり始めた。そのざわめきは大地から、森の木々そのものから生じている様だった。

暁の柔らかな日の光が森の奥に差し込むにつれて、草木はまるで眠りから覚めつつあるかの様にその身を揺らし始めた。

> i 3 8 8 7 9 — 4 7 5 0 <

不思議なざわめきは木立を揺さぶり、鳴り止まぬ喧騒と化して森の中を満たしていくのだった。

やがて、一つの小さな緑色の雫が祠の中から浮かび上がってきた。

木々の重なりの方こうからささやかに差し込む明けの陽光を受け、その雫は珠の様に輝いていた。

雫の周囲で、次第にその不思議なざわめきは高まっていき、密度を持った濃い陽炎と化して揺らめいた。

紺碧の天を覆い隠すばかりに生い茂った太古の森林。濃い霧の中で永い年月を瞑目し続ける針葉樹の連なり。白亜の光に満ちた南国の砂浜で潮風に揺れる、肉厚の灌木に咲き誇る鮮やかな色彩の花々。

陽炎が幾度かきらめきを放つ度に、夢とも幻ともつか

ない不可思議な映像が祠の周囲に展開した。

——それは正に、森の木々の見る夢と幻に他ならなかった。

彼等——森の木々の見る夢と幻は次第にまとまりを持ち、一つの形を持つて祠に浮かぶ雫の中へと凝集していった。

千年、万年の木々の瞑想の中から生まれた、泡沫の様な夢と幻は、凝縮の果てに一柱の神の形を持って緑色の雫の中から顕現したのだった。

木々の抱いた夢と幻は、もはやその神の微睡む意識に浮かぶ夢となり、自我の発現する過程の内に溶け合っていた。

——……たい。……生きたい……。

緑色の雫は、既に一つの命を持つ者として、森の中に存在していた。

——……生きたい。……生きたい！

神としての命を持つに至った、その生命の卵とでも呼ぶべきものは、こうして森の中に新たな神を産み落としたのだった。

——「我」……「我」は、ロウ・ゼーム。

植物の夢から生まれたとは言え、その姿は頭と四肢を持つヒトの形をしていた。

右だけが長い黒髪・短く揃えられた前髪の下には、第三の瞳が輝いていた。

——「我」……「我」は、ロウ・ゼーム。

千年の瞑想に耽る樹々より生ぜし夢と幻の中から生まれ出た神。

大地に座す深き緑の懷より生まれ出た神。

風にそよぐ草の群。陽光に柔らかな緑の光を返す木々

の葉——眠りから目覚めつつあるゼームの脳裏を、無数の様々な色合いの緑の光の粒が乱舞していた。

それらは、ゼームが自らを自らと認識し、初めて目を開いた時に見たものだった。

> i 3 7 9 2 4 — 4 7 5 0 <

ゼームの網膜を満たす光の乱舞は一度その形を失い、目を開いたゼームの脳裏に認識されたものは、くすんだ色の石造りの天井にはびこる濃緑のつたの姿だった。

「——夢か。」

ゼームは吐息と共に眩きを漏らし、ベッドから起き上がった。

とうの昔にガラスも破れて失われた枠だけの窓から差し込む日の光の様子よりも、部屋の片隅に放り出されていた小さな時計が昼を過ぎた事を正確に告げていた。

雲の上を渡るラデュレーの中では、窓の外の明暗は昼夜の区別位にしか役に立たなかった。

次第にはつきりとしてくる頭を上げ、ゼームはベッドの近くの壁に迄迫るつたの葉を一枚、何気無くちぎり取った。

古びて所々亀裂の走る石の壁に根を食い込ませ、つたや幾つかの種類の灌木がゼームの部屋で思い思いに枝葉を広げていた。

いつの間にかゼームの服に付着していた種が、部屋に零れ落ちて発芽したのだろう。ゼームが空中城塞都市ラデュレーにやって来てすぐ翌日には、この部屋は森へと変貌した。

無意識の内にゼームから放出される神霊力の影響を、植物が受けたのだろう——と、レウ・ファーは分析していた。

「あれは——「神々の森」よりも北の方……シエゾ地方

だったか。」

今しがたの夢に見た、自分の誕生した場所の事を思い起こし、ゼームは神州大陸の地図を頭の中に思い浮かべた。

ゼームはラデュレーへと招かれて以来、自分の生まれた土地や、誕生した時の様子を思い出す事が多くなっていた。

一体どういう心理によるものか。

昔を懐かしみ、自分の生まれた土地への愛着を感じているのか——と、ゼームは自分の胸の中に甘い感慨が生じている事に気付いた。

ベッドに腰を掛けたまま、ゼームはそのまま物思いに耽ろうつとしたが、部屋の扉を叩く音に俄に現実へと引き戻されたのだった。

「——ロウ・ゼーム、居るかね？」

重々しい音を立てて扉が開かれ、その向こうから白い仮面の顔が覗いた。

レウ・ファアの分身レウ・デアは、黒いマントの隙間から、うねる触手を覗かせて部屋の中へとやって来た。

「何の用だ？」

レウ・デアの動きにも全く関心を示さず、ゼームは顔を向けることすらしなかった。

「お前達に見せるものがある。広間に来い。他の者達も呼んである。」

それだけを抑揚の無い電子音混じりの声で告げると、レウ・デアはゼームに背を向けて、すぐに部屋を後にした。

扉が閉められた後も、ゼームは首を動かもしなかった。

今更何を見せると言うのか——。独り成りの国も、邪

神の事も、レウ・ファーや他の幻神達が何をしようともゼームにとってはどうでもいい事だった。

「……。」

暫くの間、ゼームはちぎったつたの葉を指に挟んでくると回していたが、俄に顔を上げるとベッドから立ち上がり、広間へと向かって歩き始めた。

中庭に面した回廊をゼームが広間に向かって歩いていくと、途中、ゼズ達の話し声が入ってきた。

「——君達は本気でレウ・ファーの侵略に手を貸すつもりなのか？」

ゼームが歩き続けていると、廊下の真ん中を陣取っているゼズ、パラ、ファイオ、ザードの姿があった。

どうやら、ゼズが一方的に他の者達に何事かを話している様だった。

「たった一神の機械神と、五神の幻神で神国に対して一体何が出来るといふんだ？」

ゼズの話、どの幻神も疎ましそうに聞いていた。

ザードは彼等の中で一番最初に、侮蔑と嘲笑さえ発してゼズに食ってかかった。

「下らない話はもう終わりかい？——ふん！ここから逃げ出したかったら、さっさと逃げればいいんだよ！君のつまらない話に付き合う程ボクは暇じゃないんだ！」

ザードの侮りの視線は目の前の幻神全員に向けて注がれていた。

「弱い君達と違って、ボクなら自分だけで神国を滅ぼす自信もあるからね。——ボクは、何よりもまず、あいつを——バギルを殺してやるんだ。」

恐ろしい言葉を事も無げに紡ぎ、ザードは細い目を一層、楽しい表情を浮かべて細めた。

それからすぐに、これ以上付き合うつつもりも無いと、ザードは先に広間へと立ち去ってしまった。

「レウ・ファアは、独り成りの国を作ると言ったわ。それに――地上の連中に復讐させてくれるとも。」

あどけない少女を思わせるパラの顔は、それに似つかわしくない憎悪に翳っていた。

「アタシだって同じよん。おバカな神国の連中に痛い目を合わせる為に、レウ・ファアの誘いに乗ったんだからん！」

ファイオの野太い声には、尚も説得を続けようとするゼズへの拒絶の響きがあった。

復讐や憎悪に目を曇らされているザード達の様子に、ゼズはうなだれた。これ以上の説得を諦め、ゼズは広間へと去りゆくファイオとパラの背を見送った。

暫し立ち止まって様子を見ていたゼームもまた、悄然と歩き始めたゼズの後に続いた。

ゼズに続いてゼームが広間に足を踏み入れた時には、既にザード達は中で待っていた。

説得の失敗に落ち込み、またレウ・ファアの誘いに躍らされている者達への苛立ちに、ゼズは眉をしかめて腕組みをすると、広間の壁にもたれ掛かった。

ゼズのそんな姿を見ながらも、特に声を掛けるという事も無く、ゼームは適当な崩れかけた石段の上に腰を下ろした。

幻神達が揃うと、それまで空ろに正面に向けられていた白磁の仮面の瞳に光が灯り、広間に集まった幻神達を睥睨した。

「お前達の協力で、当面必要な数の邪神を確保する事が出来た！」

レウ・ファアの言葉にパラとファイオは得意気に顔を上げた。彼女等が邪神の素材となる「深い闇」を集め、殆どの幻獣を作り出していたのだった。

「そこで、我々は次の活動に移る事にする。」

レウ・ファアの言葉が終わると同時に、その背後の壁を走る電子回路の筋の中を、虹色の光が走り抜けていった。

僅かの後、幻神達の頭上に平面的に分割された世界各地の地図が、立体映像として映し出された。

広間に聳え立つレウ・ファアの体の中から、赤黒い肉の管が絡まり合って形成された太い腕が、地図へと向けて突き出された。

「——一部の神々しか知らない事だが、この地上の世界には、レイラインと呼ばれる、生命エネルギーの流れる川のような筋が存在している。」

レウ・ファアの支配下にあるコンピュータは、分析を終えた神国からの秘密文書を、更に国語辞典と照らし合わせて幻神達に分かり易い文章に組み立て直し、レウ・ファアの言語中枢に送信した。

レウ・ファアの説明が始まると同時に、平面状の地図はひとりでにたわみ、この地上世界を示す惑星の形に組み立てられた。

星の表面には細い光の道筋が表示され、光の道が交差し合う内の幾つかは、大きく点滅する光点で表された。

「レイラインが集中する場所は「集束点」と呼ばれ、そこからは桁外れのエネルギーを抽出する事が可能だ。」

ただれや火傷を連想する表皮に覆われたレウ・ファアの手が、光点の幾つかを押す様な動きを見せた。

「我々の次の目的は、レイライン集束点を占拠する事だ

」。

莫大な量の生命エネルギーを一体どう扱うのか、何故神々の間でレイラインの知識が秘密とされているのか。そうした疑問に思いを馳せているのは、この場ではぜズだけの様だった。

やがて幻神達の頭上に浮かぶ映像は切り替わり、神州大陸の地図が大写しにされた。

地図の上に神国神殿や各地の都市や村、「神々の森」——と、地名が現れ、一つの赤い光点が「神々の森」の上で点滅していた。

「——「神々の森」が、レイライン集束点なんだね。」薄笑いを浮かべてザードが地図を見上げた。

「現在判明したのはこの場所だけだ。」

レウ・ファアは立体映像の中の点滅する光点を指差した。

レウ・ファアが神国から奪い取って来た秘密文書や資料で、レイライン集束点に関する情報については厳重な封印が施されていた。

長時間に渡る分析の結果、集束点の内の一つの、「神々の森」と言う地名がやっと分かっただけに過ぎない。

「神々の森」の何処の場所にあるのかと言う事迄はまだ分かつてはおらず、現地に邪神を送り込んでこれから探知するところだった。

「取り敢えずお前達の内の誰かに「神々の森」に向かつてもらう。」

レウ・ファアは巨大な手を振って、空中の地図を掻き消した。

「じゃあ、アタシが行くわネ。」

肩迄流れる黒髪を掻き上げ、ファイオが流し目を送りつつレウ・ファアの前に進み出た。

「いいえ！今度は私が行くわ！」

ファイオを押しつける様にしてパラがレウ・ファアに訴えかけた。パラにとっては、「深い闇」の採取という仕事も殆どファイオに取られ、今度こそは自分の手で何か仕事を成し遂げたいという思いがあった。

「まッ！何ヨ！」

「——文句があるの？」

僅かの間、二神はお互いに睨み合った。

そんな彼らのやり取りをザードは面白そうに、しかし侮蔑のこもった薄笑いを浮かべて眺めていた。

ゼスは、その間もずっと腕組みを崩さずにザード達の様子を見つめていた。

復讐や憎悪に狂った彼らへの軽蔑か、彼等やレウ・ファアと最後迄渡り合えない自分の弱さへの嫌悪感か、終始ゼスは唇を噛み、硬い表情のままだった。

パラとファイオの睨み合いは、この場の誰もが意外に思う声によって終わった。

「私が、今回は「神々の森」へ行こう。お前達に森を破壊されてはかなわないからな。」

幾本もの細い剣の様に肩から伸びた濃緑の葉を揺らし、ゼームはレウ・ファアの下へとやって来た。

「まあッッ！何ヨ、何ヨオッ！！今回もこのアタシが行くって……。」

「あなたがしゃしゃり出て……。」

意外なゼームの立候補に、ファイオとパラは驚き、文句を並べ立てて騒ぎだったが・・ゼームの容赦無い一睨みですくみ上がってしまったのだった。

「ゼームが行くか。よかるう。——では早速邪神を用意しよう。」

「要らぬ。」

レウ・ファアの言葉をゼームは冷たくはねつけた。

レウ・ファアの返事を待たず、ゼームは広間を出ようと扉の方に足を向けた。その背に、何の感情もこもらない合成音が投げかけられた。

「しかし、集束点に邪神を最低一体据える必要がある。

——では、お前が集束点の場所を突き止めた後で邪神を派遣する事にしよう。」

拒否も承諾も、どちらの返事を送る事も無く、ゼームはそのまま広間の扉をくぐって廊下に出た。

「レイライン集束点か。」

いつもの穏やかな調子で漏らされたゼームの言葉に、微かに呆れた様な響きが含まれていた。

「神国の神々の禁忌に迄手を出すと言うのか——脳髓の神よ……。」

ただ独り廊下を進むゼームの呟きを耳にする者は、誰もいなかった。

そして、レイラインを地上の神々の禁忌と知りながらも、変わらない静けさと穏やかさを湛える緑の幻神の心の内を理解出来る者もまた、そこにはいなかったのだ。——。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4352ba/>

神国 第貳部～猛き緑に沈む者～

2012年1月11日19時51分発行